

# 学生の思考力を育てる授業づくり

新井 英靖<sup>†</sup>

第66回国立病院総合医学会  
(平成24年11月16日 於神戸)

IRYO Vol. 68 No. 2 (82-85) 2014

## 要旨

「考える」とは、現実から離れたところで自分の行動や感情をみつめる「もう一人の自分」が機能することである。このように捉えると、考える力を育てるためには、現実場面で生じる困難を直接的に対処することを繰り返すだけではなく、現実とは少し異なる虚構の世界で活動したり、話し合ったりすることが必要である。すなわち、虚構の世界だから多様な場面を創出でき、そうした中で学生が自由に自分の考えを述べ、実際の対応について試行錯誤し、時には失敗することもできると考える。こうした現実とは少し離れたところで展開される学習活動を通して、現場で生きて働く「思考力」というものが育ってくるのではないか。

看護学校で学生の思考力を高めるために、看護学校の教師は時にはロールプレイなど、演習的に授業をすすめていくことが求められる。また、講義内容に関連する事例を教材化し、それをもとに考えたり、発問を工夫して、「ちょっとした話し合い」を通してさまざまな人の考え方を受け入れ、自分なりの価値観や実践方法をもつことができるような授業を展開していくことが大切である。これは、看護学校で学生を指導する教師が「教えるべき内容を深く知っている」という専門性を有していることのみならず、多様な「状況」や「文脈」を想定し、授業を通して学生の思考を深めることができる授業展開や教材開発の力が必要であることを示していると考えられる。

キーワード 虚構, 思考力, 教材開発, 発問

## はじめに

学生の思考力が低下していると指摘されるようになって久しいが、その一方で、医療や看護の世界では、患者との密なコミュニケーションを通して状況

に応じた判断力を身につけることが求められている。こうした現状をふまえると、看護学生に対する授業では、単なる知識や技能を伝達するだけでは不十分であり、看護場面などを通して文脈の中で思考させる授業を展開することが重要な時代となっている。

茨城大学 教育学部 <sup>†</sup> 教員

別刷請求先：新井英靖 茨城大学教育学部 〒310-8512 茨城県水戸市文京2-1-1

e-mail: harai@mx.ibaraki.ac.jp

(平成25年7月10日受付, 平成25年12月13日受理)

Educational Methods for Students in a School of Nursing to Develop Their Ability to Think

Hideyasu Arai, University of Ibaraki

(Received Jun. 10, 2013, Accepted Dec. 13, 2013)

Key Words: fiction, ability to think, developing teaching materials, questioning

しかし、病院などで生じる実際的な問題・課題を忠実に再現することが難しい看護学校という場で、「考える」ことが苦手な学生に文脈に即して状況判断力を身につける授業を展開するという事は容易なことではない。本稿では、こうした課題を解決するために、看護学校の授業でどのように教材を開発し、どのように授業を展開していくことが求められるのかについて検討したいと考える。

### 「考える」とはどういうことか？

担当の患者とうまくコミュニケーションが取れないと悩んでいる看護学校の学生を指導している看護師（実習指導者）が、自分の経験をもとに「散歩をきっかけに話し始める患者さんもいるのよ」とアドバイスをしたとする。そうした話を聞いた学生は「わかりました。やってみます！」と意気揚々と担当の患者のところへ行き、「散歩に出しましょう」とストレートに話しかけてしまい、患者がひいてしまったという話を聞いたことがある。

これは少し大げさな例え話であるが、「アドバイスの意味」を捉えることが苦手な学生が多くなっていることは指導者の立場にある人ならおそらく実感しているところであろう。そうした学生の特徴は、現代の若者の特徴でもあり、字句どおりに解釈し、そのまま実践しようとする傾向があるのはさまざまな業種の新人教育において指摘されている。こうした中で、ビジュアルに訴えたQ&Aやマニュアルが普及し、若者が「考える」前に「こうしたらよい」ということを教えてもらえる風潮に拍車をかけているように思われる。

しかし、Q&Aやマニュアルを通した表面的な対応方法を知るだけでは、患者や病院の状況に応じて対応を変化させることができず、そうした看護師は就職後、早い段階でどうしたらよいかわからなくなり、円滑に業務を遂行することができなくなっていく。これが、人を相手にする専門職である看護師の特徴であり、看護学生のうちから「考える」ことをトレーニングしておかなければならない所以である。

そもそも「考える」ということは、Q&Aやマニュアルが想定している現実世界で直面する困難に具体的にどのように対応するかといった行動レベル（第一次の水準）のものではない。むしろ現実から離れたところで自分の行動や感情をみつめる「もう一人の自分」が機能することである（高次の精神機能<sup>1)</sup>）。こうした「もう一人の自分」を「他者性」と呼ぶが、考える力を身につけている看護師は、他者性を駆使して自らの看護実践を振り返り、先輩の看護のコツを盗み、具体的な対応を超えたところにある抽象レベルの理解を可能にするのである。

### 虚構場面で試行錯誤することの重要性

それでは、「もう一人の自分＝他者性」はどのようにして育つのだろうか。幼児の発達から考えられることは、他者性の成長に重要な役割を果たしているものは「ごっこ遊び」や「絵本の読み聞かせ」である。すなわち、現実場面で生じる困難を直接的に対処するのではなく、それを虚構の世界で再構成した活動（たとえば、「ごっこ遊び」）の中で、「こうしたらよい」と思う気持ちを実践してみたり、現実とは



図1 思考の二つの水準

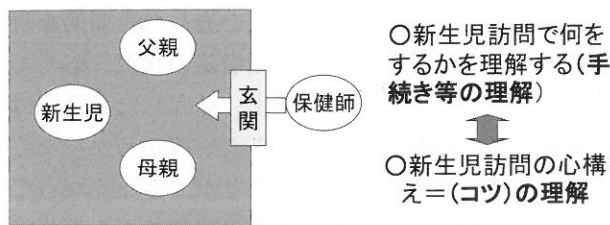


図2 新生児訪問の場面の再現

少し異なるお話の世界（たとえば、「絵本の読み聞かせ」）の中で、主人公の気持ちになりきってセリフをいってみたいすることが、高次の精神機能を育てることにつながると考えられる。

もちろん、看護学校は、少なくとも高等学校を卒業した「大人」を指導する場であるので、字句どおり幼稚園生がするような「ごっこ遊び」や「絵本の読み聞かせ」を実践すればよいというものではない。しかし、「ごっこ遊び」や「絵本」に含まれている要素、すなわち、虚構場面の中で活動したり、セリフをいったりするような学習活動というものは、看護師を育てる教育においてもとても重要なものであると考える。

たとえば、看護学校の授業の中で「新生児訪問」について取り上げた授業を考えてみたい。この授業では新生児訪問の「①意義や目的」について理解し、その後、具体的に「②訪問した先の家庭でどのようなことをするか」について学ぶことをねらいとしたとする。このとき、上記の①と②について教員が一斉講義の中で解説をすれば指導者の最低限の責務は果たしたことになるかもしれない。しかし、学ぶ側からすると、講義を聞いただけでは「どうして新生児の家に行って親と話をしなければならないのか?」「訪問した先でどのような質問が来て、どのように答えればよいのか?」など、いろいろと疑問がわいてきて、すっきりしない学生も多いと考えられる。

そこで、真の意味で新生児訪問について「わかった」と思えるようにするために、ある看護学校では、新生児訪問の現場を簡単に再現し、4人一組の小グループでのロールプレイを通して実際に演習させた<sup>2)</sup>。この授業では、父親役・母親役・保健師役・観察者という役割を設定し、この授業を担当する教師がシナリオを書いて、それに沿って新生児訪問の際のやりとりを役割演技（ロールプレイ）させるといったものであった。

学生はこうした演習を通して、新生児訪問で何を

しなければならないのかという基本的な手続きについて理解するとともに、アドリブで質問された父や母からの質問に答えるために、どのような知識をもっていなければならないのかを知ることができた。一方で、父親役・母親役を演じた学生は、保健師に指導される際の不安や期待などを実感し、それをロールプレイ後に話し合い、グループで共有することでどのような心構えで新生児訪問に臨むことが求められるのかということや、どのように対応すればよいのかといった保健師のコツにあたるものを理解することができるようになった。

こうした演習は、看護師という専門職養成においてはロールプレイなどと称されるが、幼児の「ごっこ遊び」に含まれている発達の意義と基本的には同じであると筆者は考えている。すなわち、虚構の世界での実演なら失敗も許される。失敗してもよいという状況の中だから、学生は試行錯誤してみようとする。一方で、教師の側も虚構の世界だから多様な場面を創出できる。たとえば、ロールプレイの中であれば新生児訪問で虐待家庭を再現することも可能であるが、実際の実習でそうした家庭を訪問することはきわめて難しいことだろう。こうした虚構の世界での試行錯誤や学生同士のやりとりを経験することによって、学生は多様な看護実践の現場を想像しながら、状況に応じて多面的に考えることができるようになるのではないかと考える。

### 考える授業を展開するための 教材開発と発問の工夫

以上のような演習課題（ロールプレイ）は、主体的に考える力を育てるためにとても有効な指導方法であると考えられるが、その一方で、授業時間が大きく割かれるものでもある。そのため、いつでも、どの授業でも設定してできるものではなく、「これだけは実習前にシミュレーションさせておきたい」と思うような厳選された課題を取り上げることが求められる。

それでは、看護学校の授業の中で、もっと頻繁に虚構場面を創出し、短時間で、かつ簡便な方法で「考える」時間をつくることはできないだろうか。こうしたことを可能にするのが、「教材開発」と「発問」である。たとえば、病室や病棟でよく生じる問題について事例を教材化し、当該授業の内容を理論的に学習したあとに小グループで考えるといった授業展

開が挙げられる。たとえば、筆者が非常勤で担当している教育学の授業では、子どもの発達過程を学んだあとに、次のような課題を出して看護師としてどのように対応するかを、小グループで15分くらい時間をとって話し合わせている。

5歳の男の子が心臓の手術のため入院しています。これまで入退院を繰り返してきたこともあり、とても甘えが強く、とくに「苦い味のする薬は飲まない」と看護師を困らせています。こうした幼児に対して薬を飲むことで楽しく遊べるようになることを理解させたいと考え、簡単な人形劇をつくることにしました。幼児が薬を飲む必要性が理解できるような楽しくわかりやすい人形劇のシナリオを考えてみてください。

さらに、小グループで考える時間を設けることすらできないようなときには、講義形式の授業の中で発問を工夫することによって、学生にほんの数分、「考える」時間を与えることも可能である。たとえば、カウンセリングの技法について話し、「共感」することの重要性について講義をしたあと、「痛い治療をするくらいなら、治療しなくてもよいという患者に対して、あなたはどのように応えますか？」と発問してみる。

具体的には、はじめ隣の人と1-2分程度でどのように対応するかを話し合い、教員の側が何名か指名して「2人で考えたこと」を発表させる。そうしてさまざまな意見を共有した上で、教員の考えや看護師になったときの対応のコツなどを話す。こうした「ちょっとした話し合い」の時間を通して、さまざまな人の考え方を受け入れ、自分なりの価値観や実践方法をもつことができるように導いていくのである<sup>3)</sup>。

---

### 「状況」や「文脈」を創出する教師の専門性

---

以上のような教材開発や発問の工夫も、いわば「虚

構世界での思索」といっても過言ではないだろう。なぜなら、事例を教材化したり、「あなたならどうする？」と発問するということは、看護師となったときに直面する「状況」や「文脈」を学生に提示することであり、現実でありそうな場面ではあるが、今現在、おこっていることとは違う「虚構」と捉えられるからである。

つまり、看護学校の学生の思考力を育てようとしたら、「授業で～について教えよう」という意識をもっているだけでは不十分であり、学生が「思考」しやすい「状況づくり」や「文脈の創出」をする力が教師に求められる。そこには、どこまで具体的な状況を学生に提示するかや、考えさせるためにどのように学生に「発問」するかといった教授行為が含まれている。すなわち、看護学校で学生を指導する教師には「教えるべき内容を深く知っている」という専門性のみならず、「状況」や「文脈」を創出し、学生の思考を深めることができる教育方法に関する専門性<sup>3)</sup>が必要であるといえるのではないだろうか。

〈本論文は第66回国立病院総合医学会シンポジウム「学生の思考を育てる」において「学生の思考力を育てる教材開発と発問の方法」として発表した内容に加筆したものである。〉

---

#### [文献]

- 1) Vygotskiĭ LS 著、柴田義松監訳。文化的-歴史的な精神発達の理論。東京：学文社；2005。
- 2) 野村ユカリ、山室仁美、池田万喜子ほか。地域看護学 対象別地域活動論Ⅰ 新生児訪問指導の実践を教材にして。京都中央看護保健専学紀 2010；1：83-96。
- 3) 新井英靖、荒川真知子、池西静江。考える看護学生を育てる授業づくり。東京：メヂカルフレンド社；2013。